



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2542 号 2015.7.18 発行

### 家庭用ロボット開発でトヨタが新組織 障害者や高齢者助ける「HSR」



産経新聞 2015年7月16日  
トヨタ自動車が開発する生活支援ロボット飲料などを取ってくることができる



トヨタ自動車は16日、障害者や高齢者らの生活を支援する家庭用ロボットの早期実用化を目指し、9月に新組織を立ち上げると発表した。

組織に参加する大学などの研究機関にロボットを貸し

出し、研究成果を共有して開発を促進させる。

トヨタの生活支援ロボットは「HSR」。本体は円筒形で、高さ最大135センチ、重さ約37キロ。搭載したアームで床の上の物を拾ったり、棚から物を取ったりできる。

新組織の名称は「HSR開発コミュニティ」。発足時に数機関が参加する予定で、来年4月以降、さらに10機関程度の参加を見込んでいる。

### 皇太子さま、知的障害者のアート施設を視察 大阪通所者の男性に声をかける皇太子さま=16日午後、大阪市平野区のアトリエインカーブ、代表撮影

朝日新聞 2015年7月16日

皇太子さまは16日、大阪市平野区にある知的障害者のアートスタジオ「アトリエインカーブ」を視察した。運営する社会福祉法人の今中博之理事長(52)の解説を受けながら、作品を鑑賞。今中さんによると、皇太子さまは「細かく描かれていますね」などと感想を述べたという。



制作中に皇太子さまに声をかけられた寺尾勝広さん(55)は作品を見てもらうのが夢で、「僕の願いがかなった」と喜んだ。

### 内灘の西村選手に 文科省優秀者表彰 障害者スキー入賞 中日新聞 2015年7月17日

四月の知的障害者スキー世界選手権大会ノルディック競技三種目で上位入賞したとして、内灘町西荒屋の会社員西村潤一選手(36)=内灘町スキー協会、宇野甘源堂、写真=が十七日、文部科学省から国際競技大会優秀者等表彰を受ける。

文科省によると、障害者スポーツの世界選手権大会が表彰対象となるのは本年度が初めてで、知的障害者のスキー選手では県内唯一という。

西村選手は、スウェーデンであった同大会に六年ぶりに挑み、男子スプリントで二位、同フリーとクラシカルでそれぞれ三位に入った。「金ではなかったが、メダルを取ることができてうれしい。パラリンピックを目指して今まで以上にトレーニングを頑張りたい」と喜んでいる。

長年活躍を支えた内灘町スキー協会の顧問尾本英臣さん(79)は『「やったな。これでおわりじゃないぞ。いくつになっても頑張れ」と声を掛けたい」と祝福している。

表彰式は東京都内のホテルである。スポーツ功労者延べ百十一人、コマツなどスポーツ功労団体六団体、西村選手ら国際競技大会優秀者など延べ三百六十二人、ユースオリンピック競技大会優秀者など四十二人が表彰を受ける。(谷知佳)



### 千葉) 企業の障害者雇用、貸し農園で橋渡し

朝日新聞 2015年7月17日

障害者の就業促進のため企業に義務づけられた法定雇用率。多くの企業で達成できていない中、県内の農園を企業に貸し出し、研修を積んだ障害者を雇用してもらう取り組みが成果を上げている。

市原市のJR内房線五井駅から車で約15分。3・5ヘクタールの敷地にビニールハウス50棟が並ぶ。障害者就労支援会社「エスプールプラス」(本社・東京)が運営する「わーくはびねす農園」。トマトや小松菜、メロンなどの約20種類の農作物が栽培されている。農園長の中嶋照雄さんの指導を受けて農作業をする＝市原市今富



農園長の中嶋照雄さんの指導を受けて農作業をマスターする＝市原市今富

一画で知的障害のある3人が種まきや水やりをしていた。その一人、和田啓二さん(20)は「野菜が成長していくのが楽しい」。指導する農園長の中嶋照雄さん(68)は「言うことが



伝わらなかつたり、ぎこちない動作だつたりなど個人差はあるが、個性を引き出せるよう気を配っている。



### 栃木県庁の売店に障害者施設商品 常時販売、PRに

下野新聞 2015年7月17日

障害者の工賃アップにつなげようと、県は16日、県内の障害者施設で作られた商品の常時販売を県庁2階の生協売店で始めた。

販売スペースは売店の一角に設けられ、雑貨やせつけんなど約20商品を販売。県と障害者の就労支援施設が会員の「とちぎセルフセンター」が、展示商品の決定や入れ替えなどを行う。

この日は売店のイベントスペースで「とちぎナイスハートバザール in 県庁生協」も開催され、6カ所の障害者施設が出店した。

県障害福祉課によると、「とちぎナイスハートバザール」はこれまで年に2回、県庁1階ロビーで開催していた。今後はロビーとは別に毎月1回、県庁生協でも開催する予定。

## 牛タン加工受託 被災地の障害者事業所が奮闘

河北新報 2015年7月17日



牛タンの加工に取り組む利用者ら  
施設開放の催しで牛タンを焼く我妻施設長

宮城県亘理町の就労継続支援B型事業所「えいむ亘理」が牛タンの加工事業に取り組んでいる。業務提携するメーカーの陣中（仙台市）に全量を出荷。安定した取引が



施設を利用する障害者の所得向上と自信につながっている。

事業は2013年7月開始。陣中からの出向を含む職員8人と知的障害のある利用者32人が、オーストラリア産の生牛タンの皮むきや熟成、スライス、パック詰めなどに携わる。

納入量は月に最大13トン。商品はJR仙台駅や仙台空港などで販売され、宮城野区にある陣中本社工場前や仙台空港の飲食店でも提供されている。

我妻時彦施設長（46）は「障害者の事業所と一般企業の本格的な提携例は全国でもほぼないのでは」と胸を張る。職員は陣中で研修を受け、加工技術や品質管理などを利用者

に指導。高度衛生管理方式「HACCP（ハサップ）」と同水準の自主管理態勢も整えた。施設は05年4月、社会福祉法人はらから福祉会（宮城県柴田町）が開所した。当初は豆腐や魚干物などの製造が主業務で販売先が少なく、利用者の時給は300円ほど。高台にある施設は東日本大震災で大きな被害は出なかったが、自宅や家族を失うなどした利用者の暮らし改善につなげようと業務転換に踏み切った。

現在は「月給7万円」を目指し、年2回のボーナスも支給している。今月11日には施設を開放し、牛タンの炭火焼きを初めて、地域の住民らに販売した。

我妻施設長は「利用者は映画鑑賞や買い物などを楽しめるようになり喜んでいる。施設開放も業務内容を地域に知ってもらう機会になった」と語る。陣中の担当者は「職員の粘り強い指導が実を結んでいる。利用者が独り立ちできるよう今後もバックアップしたい」と話す。

## 別府富士通エフサス太陽創立20周年 特殊技術に障害者の力

大分合同新聞 2015年7月17日



障害者と健常者が共に働いている共同出資会社「富士通エフサス太陽」

太陽の家と富士通エフサス（本社・川崎市）の共同出資会社「富士通エフサス太陽」（別府市内竈）が創立20周年を迎えた。製造業中心だった障害者の仕事を、現金自動預払機（ATM）のリペア（修理）など特殊技術が必要な分野に広げながら発展している。17日に記念式典がある。

現在は社員60人（うち身体障害者26人、精神障害者4人）と太陽の家の訓練生7人が、ATMやパソコン、プリンターの修理業務、ITシステムの運用管理などの仕事に当たる。

職場内では、障害者がスムーズに仕事ができるような環境を整えている。車椅子の社員が仕事をしやすいよう部品を回転させる装置や、片手だけで作業できる道具もある。「適切な配慮はするが、仕事で遠慮はしない」をモットーに障害者雇用を進めている。

太陽の家の共同出資会社8社の中で最も新しい。1992年に発足した太陽の家の機器科が前身で、95年7月3日に設立した。太陽の家の創設者、中村裕博士（故人）の理念に共鳴し、障害者の社会参加と自立を支援した。2014年度は売上高2億8900万円・経常利益2千万円で、堅調に推移している。

能沢晴雄取締役工場長は「障害者と健常者が共に働く会社として安定成長を目指し、事業領域の拡大を図りたい。精神障害者の雇用にも力を入れる」としている。

**日比野克彦さん監修 アート展 読売新聞 2015年07月17日**  
メディアコスモス内のギャラリースペースで企画展を準備する日比野さん

岐阜市の新図書館複合施設「メディアコスモス」1階展示室では18日から、県美術館館長の日比野克彦さんが企画・監修した「みんなのアート」展が始まる。障害者やアート作家らが制作した絵画や造形などの作品約350点を紹介する。来月16日まで。

同展のテーマは「それぞれのらしさ」。個を大切にしたい社会づくりの大切さを訴えようと、障害者によるアート展示で知られる「みずのき美術館」（京都府亀岡市）などの作品を中心に構成した。このほか、長良川の石やカラスの巣なども展示する。日比野さんは「作品を見た人がドキッとすることから芸術になる。何を目的に作られたのかを考えながら、見てほしい」と話している。入場無料。



**山下清展、ゆかりの市川で…仲間の作品も展示**

読売新聞 2015年07月17日

山下清の代表的作品が展示されている会場（市川市文学ミュージアムで）



放浪の画家、裸の大将として知られる山下清と障害児福祉施設で共に過ごした3人の企画展「描くことが生きること 山下清とその仲間たちの作品展」が、市川市鬼高の市文学ミュージアムで開かれている。山下ゆかりの地でもある市川で初めて開かれる本格的な作品展だ。8月30日まで。

山下は1922年、東京の浅草生まれ。知的障害があり、12歳で市川市内の知的障害児福祉施設「八幡学園」に入園した。ここで貼り絵と出会い、芸術的才能を開花させた。

ところが6年後、突然、学園を飛び出し、15年半、放浪を続けた。この間、学園にたびたび戻っては、印象に残った旅先の風景を貼り絵や油絵などに仕上げた。放浪生活を終えてからは全国で展覧会を開き、71年に49歳で生涯を終えた。

企画展では代表的作品とされる「江戸川の花火」「八幡様のお祭り」「トンネルのある風景」など44点が展示されている。また、山下とほぼ同じ時期に八幡学園に入り、いずれも若くして亡くなった石川謙二（享年26）、沼祐一（同18）、野田重博（同20）のクレヨン画や貼り絵など45点も展示されている。

会期中の7月20日には映画「裸の大将」の上映会、8月9日には講演会「なぜ？ どうして？ 真実を求めた山下清」などの関連イベントが開かれる。企画展の観覧料は一般500円。問い合わせは同ミュージアム（047・320・3334）へ。

### 神戸で義肢装具会議 31年秋、70カ国から5千人 発展途上国へサービス普及

産経新聞 2015年7月17日

各国の義肢装具士や医師らが参加する国際義肢装具協会（ISPO）の世界大会が、平成31年10月に神戸市で開かれることが決まった。約70カ国約5千人が集まる国際会議で、平成元年に神戸市で開催されて以降、国内では30年ぶり2回目という。

ISPOは医師や義肢装具士、エンジニアなど約3千人で構成。義手や義足など義肢装具の技術向上などに取り組んでいる。

県によると、ISPO日本支部は神戸医療福祉専門学校三田校（三田市）に設置されている。同支部会長の陳隆明氏（県立リハビリテーション中央病院ロボットリハビリテーションセンター長）らが中心となって世界大会の誘致を働きかけてきたという。

センターは昨年6月、上肢を失った子供のために、筋肉の収縮から生じる微弱な電気信号で指を動かす筋電義手を貸し出す「小児筋電義手バンク」を設立した。

大会は10月7～10日、神戸市の神戸コンベンションセンターと神戸ポートピアホテルで開催され、発展途上国への義肢装具のサービスの普及などが話し合われる予定という。

県障害者支援課は「東京パラリンピックの前年なので、トップアスリートを招いたスポーツイベントも計画したい」としている。

### 商品券求め行列 長野市、先行販売で

読売新聞 2015年07月17日

雨の中、商品券を求めて発売開始前から傘の列ができた（16日午前9時47分、長野市のビッグハットで）

長野市のプレミアム付き商品券が16日、同市のビッグハットと南長野運動公園総合球技場で先行販売された。未明から購入希望者の行列ができ、午前10時の発売開始の1時間前には8億円分の予定数に近づいた。販売期間は16、17日の2日間を予定していたが、正午過ぎには完売した。一般販売は18～20日に行われる。

商品券は1万円（額面1万2000円）と5000円（同6000円）の2種類で、発売総額は24億円。1人あたり、1万円10セット、5000円2セットまで購入でき、18日から来年1月11日まで市内約2400店で利用できる。

先行販売は、市在住の子育て世帯や高齢者、障害者が対象。商品券実行委によると、両会場には6000人以上が並び、購入できたのは約5500人という。

ビッグハットに午前3時前に着き、母と孫の分を買ったというバイク販売業、小林勇治さん（66）は「買いに来られない人もいる。もっといい方法がないものか」と複雑な表情だった。



### 社会保障費、6700億円増 16年度の概算要求基準

日本経済新聞 2015年7月17日

政府は16日、2016年度の予算づくりに着手した。各省の要求ルールとなる「概算要求基準」で社会保障費の前年度と比べた増加額は6700億円と15年度の基準より約2割減る。景気回復で生活保護費の伸びが鈍ると見込むためだ。歳出総額には上限を設けない。財務省は年末までの予算編成でさらに歳出を抑える考えだが、関係業界の反発を乗り越え実行できるかは不透明だ。

「同情の余地は一定程度あるが…」障害ある41歳娘殺害、81歳父親に懲役6年求刑 和

## 歌山

産経新聞 2015年7月17日

長女＝当時（41）＝の首を電気コードで絞殺したとして、殺人罪に問われた和歌山市土佐町の無職、村井健男被告（81）の裁判員裁判の論告求刑公判が16日、和歌山地裁（浅見健次郎裁判長）で開かれた。検察側は「強い殺意をもち、犯行態様は軽くない」として懲役6年を求刑し、結審した。判決は17日。

論告で検察側は「被告人に同情の余地は一定程度あるが、被害者と距離を置くなど殺害以外にも方法があった」と指摘。一方の弁護側は「重い精神障害のある娘の面倒を長年見るにあたり、肉体的にも精神的にも限界に達していた。犯行を後悔しており、高齢である」として執行猶予付きの判決を求めた。

最終陳述で村井被告は「論告を真剣に受け止めている。私のような人が出ないように強く希望する」と話した。

起訴状などによると、村井被告は2月14日午後10時20分ごろ、自宅で同居する長女の背後から首に電気コードを巻き付けて殺害したとしている。

## 子どもを叩いていいほどの「正しい理由」なんてない 日本経済新聞 2015年7月17日

茅ヶ崎市役所こども育成相談課職員の伊藤徳馬さんは、むずかしい子を育てるコモンセンス・ペアレンティング（CSP）という手法を伝授する「怒鳴らない子育て練習講座」を開設した立役者です。2013年夏には『どならない子育て』を出版しています。伊藤さんにインタビューし、CSPについて詳しく教えてもらいました。

### ■CSPは、褒めてしつける子育てのプログラム

2007年に茅ヶ崎市役所のこども育成相談課に異動した私は、親御さんに「叩くのはまずいです」と言っていました、「じゃあ、叩かずにしつけるにはどうしたらいいんですか？」と聞かれたときに答えられませんでした。自分自身、保育士資格も無く、心理学を勉強したわけでもなく、素人でしたから。「これは税金をもらっているプロの仕事としてまずい」と感じていました。



#### 伊藤徳馬さん

虐待の予防策が欲しいというのは、職場の一致した見解でもありました。そんなとき、一緒に仕事をしていた家庭児童相談室の相談員さんにCSPの資格を取得していた方がいて「これはいいよ」と薦めてくれたんです。

CSPとは、神戸の児童養護施設の職員だった方が作った、子どもへの伝え方、ほめ方、叱り方などをロールプレイで練習して身に付ける子育て講座です。

この内容は、子育ての基本と言われる「褒めましょう」「目を合わせましょう」「諭すように話しましょう」など、当然やれば成果が出る、いわば子育てでは“当たり前のこと”を体系的に分かりやすくまとめたものです。講座ではDVDを見たり、ロールプレイをしたり、行動療法的に練習して、日々の実践に生か

せるような実力を身に付けていきます。

しかし、CSPの勉強を始めた当初は、私自身もさほどこの手法の力を信じていませんでした。「そんないい話なら、もっと普及していなければおかしい」と斜に構えてさえいました。それが「いける！」という考えに変わったのは、当時2歳半だった長女を叱るときに使ってみて成果を実感したからです。

### ■食卓に落書きした娘に「クレヨン好きだもんね」

娘があるとき、家でお絵描きをしていて食卓にクレヨンで落書きをしてしまいました。最初はいつも通り「ごめんなさいは？」という一言を強要してしまったんですが、「やだ～」と大泣きで猛反発されました。

そのときは珍しく、たまたまこちらの気持ちに余裕があったので、CSP 講座で教わった通り「分かった、分かった。クレヨン好きだもんね。テーブルにクレヨンで絵を描いてみたかったの？」と聞いてみたところ、子どもが泣きやんで「うん」と返事してくれました。「あっ、会話が通じた」と驚きましたね。

今までは、やっぱり親としても引いちゃいけないところもあると思ってしまい、大泣きしていても無理やり謝らせていました。それで、子どもを寝かせた後、「あ～、さっきの言い方はまずかったな～」と自己嫌悪に。「明日からはあんな叱り方は絶対しないぞ」と心に誓うという日々でした。親のほうはしつめたつもりでも、実際は子どもの側には何も身に付けられていないので、また次の日に「コラ～！」と叱りつけてしまうことに。

それなのに、前述の通り、CSP の手法を使ってみたところ、叱ってはいるんですが、初めてコミュニケーションが成立している感じがしたんです。

私：「パパはクレヨンを使うなら、紙に描いてほしいんだよね。紙ってどれだっけ？」

娘：「コレ」

私：「そう。じゃ、次からクレヨン使うとき、どこに描くの？」

娘：「紙」

私：「そうだよ、できるじゃん」

こんなふうに、すごく丸く収まった感じがしました。

#### ■CSP 講座開始。年間 100 人以上が受講

翌日、登庁して課長に「これ、いけると思うんです。うちでも講座を事業化しましょう」と提案しました。子育て支援は市の重点施策でもあったので、課長もすぐに賛成してくれました。虐待してしまった経験のある親御さんだけでなく、広く一般的な保護者向けに開講することにしました。例えば、保育園や小学校の先生だって、家に帰れば、自分の子どもには怒鳴ってしまうことがあるというのはよくある話ですし、虐待関係の学会に参加する人達ですら「ご自宅で自分のお子さんを怒鳴ってしまう方は？」と挙手を求めてみると、意外に多くの方が正直に手を挙げるものですから。

日本は子育ての分野の考え方がまだまだ遅れています。保育園・幼稚園・学校といったプロの現場でも、子どもとの接し方に関して明確な指針は無い場合が多く、先輩の背中を見て学んでいるといった状況なんです。

何を褒め、何を叱ればいいのか曖昧で、ただ「子どもを叩いてはいけない」と言われても「では、何をすべき」なのかは教えられていない。プロも一般家庭もそんな状況にあるから、全方位に対して発信することに意義があるということになりました。

2010 年に記者発表をして、3 月 1 日の茅ヶ崎市の広報紙に CSP 講座「怒鳴らない子育て練習講座」参加者募集の記事を載せました。大勢集まり過ぎても大変なので、「子どもを叩いてしまうことがあって、虐待へ進む心配を抱えている方を対象とする」というただし書きを付けたのですが、それでもすぐ 30 人集まるほどの人気ぶりでした。

年々開催数を増やし、現在では 2 時間×7 回の講座を市役所で平日に年間 12 セット、市内の公立保育園 6 園で土曜日に年間 6 セット開催するまでになりました。それにより、通常講座はこれまでの累計で約 500 人、1 年当たり約 100 人。2 時間×1 回のダイジェスト版は年に 200～300 人が受講しています。講座はいずれも託児付きで無料で行っています。

#### ■日本に“褒める子育て文化”を根付かせたい

私達、現在の親世代は、ぎりぎり“叱られて育てられてきた世代”ですよ。厳しく育てるほうが、子どもに向き合える立派な親だという風潮もあったと言えるでしょう。今は「子どもは叩いてはいけない」「褒めて育てなければ」という社会になってきているわけです。でも、私達自身は褒められて育てられてきていない。時には怒鳴られたり叩かれたりしながら育ててきたから、“褒める子育て”の具体的なやり方が分かっていない。それが本音ではないでしょうか？

今、私達世代が頑張って“褒める子育て文化”をつくっていけば、子ども達の代には褒める文化が根付いているのではないかな。私はそう考えています。

褒める子育ての方法の一つがこの CSP です。茅ヶ崎市は「日本の子育てを変えます」と宣言して、この講座を始めました。既に神奈川県だけでも17~18、全国で約50くらいの市町村がCSPの講座を開設しています。ご興味のある方は、お住まいの町でCSPの講座があるかどうか、ぜひ調べてみてください。(ライター 大友康子、撮影 稲垣純也) [日経DUAL2014年6月9日付の掲載記事を再構成]

## 若者が望む子どもの数は？ 独身は男女ともに「0人」が増加

朝日新聞 2015年7月17日

子どもを望まない独身の若者が10年間で増えている。厚生労働省が若者を対象に実施した調査で、2013年は希望する子どもの数を「0人」と答えた人が独身男性の15・8%、独身女性の11・6%。03年調査では独身男性が8・6%、独身女性が7・2%で、いずれも数ポイント上昇した。厚労省が実施した「21世紀成年者縦断調査」で明らかになった。03年は調査当時21~30歳だった1万820人の回答。13年も調査当時21~30歳だった1万2284人の回答を集計した。同じ質問をして、10年間での若者の意識の変化を分析。厚労省が15日に結果を発表した。

子どもを望まない独身者が増えた一方、既婚者は逆の傾向にある。03年調査で既婚者のうち「3人以上」の子どもを希望する男性は31・4%、女性は30・4%だったが、13年調査で男性は46・2%、女性は47・4%に増えた。厚労省世帯統計室の担当者は「独身で子どもを望まない比率が高まったのは、非正規雇用の広がりや結婚を望まない人の割合が増えていることなど、複合的な要因が影響したと考えられる」と話している。

(久永隆一)

## 7月17日付・障害者に手を差し伸べよう

四国新聞 2015年7月17日

改札を抜けると、すぐにその初老の男性が目にとまった。白い杖(つえ)で足元を探りながら、不安そうに歩を進めている。東京のJR新橋駅。朝のラッシュ時とあって、皆が気ぜわしように先を急いでいる。

「危ない。声を掛けようか」「でも断られたらどうしよう」「周りの注目を集めるのは恥ずかしい」。瞬時にいろんな思いが頭を駆け巡り、結局そのままやりすごした。その日は何かの拍子に朝の出来事が思い起こされ、心が晴れなかった。

翌日、また同じ場所でその男性に会った。「きょうこそ助けよう」。そう決心した瞬間、近くの人が声を掛けた。安堵(あんど)する一方、前日に手を差し伸べなかった自分を恥じた。

政府公報では「目の不自由な人やお年寄りが駅などで困っていたら声掛けを」と呼び掛けている。そして「視覚障害者を誘導・警告する黄色いブロックの上に物を置かない」「必要としている人に席を譲る」など、健常者に配慮と手伝いを求める「心のバリアフリー」も提唱している。

厚生労働省によると、「身体」「知的」「精神」を含めた障害者数は全国で約788万人。国民の6%が何らかの障害を有している計算だ。手を差し伸べようと声掛けしても、中には「自分一人で大丈夫」と断る人もいるだろう。それでもいいではないか。政府公報には「善意は伝わるので、がっかりしないでください」とある。

冒頭の目の不自由な男性にはそれ以降、お目にかかっていない。今度こそ、気後れすることなくお手伝いしよう。(Z)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

